障害者は、一生障害とつき合う存在…

昨日、ご自身が盲ろう者であるの東大の福島智先生（バックナンバー書籍等読後感関係Ｐ 2003.11.　4.「『指で紡ぐ愛』読んで思い出すのは……」：参照）の講演会が山形であり、聴講してきた。

先生は、講演の中で「支援者は、いつご自身の都合から盲ろう者から離れて行くこともあり得る存在。盲ろう者は一生盲ろう障害から離れられない。それだけに、盲ろう者は支援者に頼るだけでなく、まず自らが生きていく姿勢を築きあげる努力を惜しまないように。また、支援者も、真に当事者が生きていくエネルギーを身につけるべく、支援者が手を出せば簡単に片づくと思われる問題であっても、盲ろう者の理解・納得のペースを大事にして、寄り添い続けて欲しい」との趣旨の話があった。

この講演を聞いていて、私も現職時代のことを思い出した。

卒論、修論等で重症児と事例的に係わり合うことを希望する多くの若者と出会い、接してきた。中には、どう重症児と係わり合っていいのかを悩み、道半ばで弱音を吐き、係わり合いを辞めたいと申し出て来る若者も何人かはいた。

そうした時、「あなたはこうして悩み、子どもから離れることは可能。でも、子どもたちは、自分が障害児ということで悩んだからといって、障害児であることを明日から辞めたいと思っても辞められない。一生自らの障害につき合って生きて行かなくてはならない。ここのところをしっかりあなたなりに考えないと、この子どもとの係わり合いを辞めたとしても、他で障害児と真に係わり合いが出来るようになるとは思えない。『障害児に寄り添う』とは、悩み、迷いながらも向かい合い続ける姿勢が必要。それが『共に歩む』ということでないかと私は思う。係わりの結果をあれこれ考え過ぎて悩むのではなく、悩みながらも共に歩む、今のこのプロセスこそが大事と思う。まあ、後はあなたの判断に任せる。」と話して、つき離したものである。

殆どの若者は、その後も係わり合いを続け、卒後も自らからも逃げることなく、それぞれの職場、立場で、障害児・者問題に向き合い続けてくれている。

（2004 年 10 月 18 日　記）